

転移病巣によりはじめて診断された バレット食道腺癌の2症例

都立府中療育センター 内科¹⁾ 同 小児科²⁾

富永 恵子¹⁾ 小峯 聡²⁾

本発表に関する筆頭演者及び共同演者の利益相反はありません。

はじめに

- ・現在、胃酸または胆汁の食道内逆流により生じる**逆流性食道炎**から**バレット食道**を生じ、バレット食道を母地として**バレット食道腺癌**が発症すると考えられている。
- ・胃食道逆流症(GERD)は重症心身障害児・者(重症児・者)に高頻度に認められており、今回の**遠隔転移**により**バレット食道腺癌**と**診断された2症例**を通して、**バレット食道腺癌の早期診断**について検討した。

症例1(1)

30歳 男性 大島分類1

【臨床診断】#1 周産期障害後遺症

#2 喉頭軟化症

#3 **胃食道逆流症**

【家族歴】父方の祖母:85歳時、**口腔内癌**

母方の祖父:65歳時、**喉頭癌**

【既往歴】在胎32週で**極低出生体重児**で出生。
重度の痙性麻痺と知的障害及び
難治てんかんを後遺。

症例1(2)

【臨床経過】

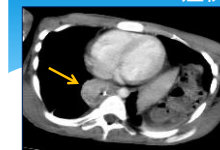
- ・14歳時に発熱、顔色不良、**コーヒー様嘔吐**、**タール便**を生じ入院。入院中に気管軟化症による心肺停止を生じ、**喉頭気管分離術**を受けた。その後よりコーヒー様胃残をしばしば認めたが、**内視鏡による精査は行われなかった**。
- ・コーヒー様胃残はコントロール不良。
- ・30歳になってからは**鮮血混入する胃残**を認める様になっていた。

症例1(3)

【現病歴】

- ・30歳時、定期外来で**肝機能異常 (GOT143 GPT97 LDH270 ALP1411)**を指摘され入院。腹部造影 CTで**食道腫瘍**、**多発性肝腫瘍**と診断。引き続き行われた上部消化管内視鏡で**バレット食道(long segment barrett' esophagus:LSBE)**及び**バレット食道腺癌**と診断された。
- ・**StageIV**で根治術は不可能であり疼痛緩和を主体に加療。
- ・癌性腹膜炎が悪化し**約3ヶ月の経過で死亡した**。

症例1 (CT所見)



入院時CT 食道腫瘍



入院時CT 転移性肝癌



入院時CT 左肋骨転移



入院1ヶ月後CT 肋骨転移巣増大

症例1 (病理所見)

【病理診断(主病変)】

- #1 **バレット食道腺癌**(隆起型高分化型腺癌、8x3x2cm)
 #2 胃壁内、肝、左右肺、左副腎、腎臓のリンパ管内、
 及び傍大動脈や腸間膜リンパ節への転移



バレット食道腺癌(3型 8x3x2cm)



多発性転移性肝腫瘍

症例2 (1)

54歳 男性 大島分類2

- 【臨床診断】#1ダウン症候群 #2**胃食道逆流症**
 #3**バレット食道** #4 環軸椎亜脱臼

【家族歴】母: **肺癌**(62歳で死亡)、叔父: **食道癌**

【既往歴】34週、2000gで出生。

保育器にて経管栄養後6日目より在宅保育。
 新生児期に痙攣、3か月時に白内障を認め
15歳時、21トリソミーと診断。

症例2 (2)

【臨床経過】

- ・13歳頃～**吐血**生じ、精査にて出血病変は見つからず。
- ・33歳頃～**コーヒー様嘔吐**増加。
- ・37歳時、**食道潰瘍**と診断。
- ・41歳時、**胃食道逆流症**及び**バレット食道**と診断された。
- ・43歳時、H2ブロッカー内服にて食道炎は軽快。吐血はほとんどなくなったが、**鉄欠乏性貧血**は持続。
以後、**内視鏡検査は行われていない。**
- ・53歳～ **胃管の挿入が困難**となった。

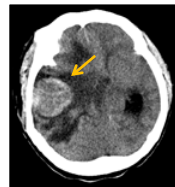
症例2 (3)

【現病歴】

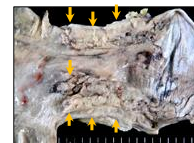
- ・54歳時、急に**不随意運動**を認める様になり、3ヵ月後に**意識レベルの低下**を認めた。
- ・頭部CTにて**右側頭葉に内出血を伴う脳腫瘍**と**脳ヘルニア**と診断。摘出手術後**転移性腫瘍(腺癌)**と診断され1ヵ月後に死亡。
- ・剖検にて**バレット食道(7.5cm, LSBE)**、**バレット食道腺癌**及び**脳転移**と診断された。

症例2 (4)

【画像及び病理所見】

頭部CT
転移性脳腫瘍(右側頭葉)

胸部CT 食道裂孔ヘルニア



剖検:バレット食道腺癌 (3型 4.2x2cm)

考 察(1)

- 1) 今回の症例1は約16年間、症例2は約20年間に及ぶ**胃食道逆流**を認め、それによる**逆流性食道炎**が**バレット食道**を形成し、さらに**バレット食道腺癌**発症へと経過したと思われる症例である。
 さらに、2症例のバレット食道は、**発癌リスクの高い**いわゆる**ロングバレット(LSBE)**であった。

考 察(2)

2) GERDを有する重症児・者のバレット食道の頻度は不明であるが、2004年に小角らは重症児14例を含む小児GERD症例での検討で10年前後の経過でバレット食道を生じたと報告している。今回の症例は、14歳ないしは13歳で吐血症状を有しており、症例2はバレット食道と診断されていた。早期の内視鏡検査さらに定期的な内視鏡による経過観察がなされていれば、バレット食道腺癌の早期診断に結びついた可能性があった。

結 語

- 1) 今回、転移病巣より診断されたバレット食道腺癌の2症例を報告した。
- 2) 吐血時の内視鏡検査やバレット食道の経過観察がなされないことでバレット食道腺癌の早期診断には至らなかったと考えられた。
- 3) バレット食道及びバレット食道腺癌の早期診断には、有症状のGERDに対する内視鏡検査と定期的な内視鏡による経過観察が必要である。

謝 辞

症例1の病理解剖を賜りました都立小児総合医療センターの福沢龍二先生、症例2の病理解剖を賜りました都立神経病院の小森隆司先生に深謝いたします。

ご清聴ありがとうございました。